

レントゲンとX線のリスク意識(4)

――創造的知性と負の遺産――

森 雄兒

第1章 X線の発見

□ 4. X線の発見とその反響

NitskeはX線発見に対する当時の反応を次のように紹介している。

「沢山のメッセージが世界中からレントゲンに洪水のように送られてきた。その大半は素晴らしい発見に関するお祝いの辞であったが、中には中傷とか嫉みとか批判するものもあった。また非難するものすらあり、その上”全人類の破滅をもたらす死の線”という死の恐怖を表明するものもあった。」(『レントゲンの生涯』 W.Robert Nitske, P81)

レントゲンがもっとも心配した「死の光線」という煽情的受け取り方は、圧倒的多数の賛辞の山にかき消され、レントゲンの情報戦略は見事に成功し目的を達成している。

しかし、新聞報道の内容に対して、レントゲンはめずらしく友人ツェンダーへの手紙で次のように泣き言のようなことを書いている。

「ウィーン新聞が素頭を切って宣伝ラッパを吹きならし、それから他のものが追随したのです。2、3日で何もかもうんざりしてしまいました。私自身の研究はもはや見る影もなくなってしまいました。写真は私にとって結論への手段であったのですが、これが一番大事なことにされてしまったのです。」(1896年2月8日「ツェンダーへの手紙」より)

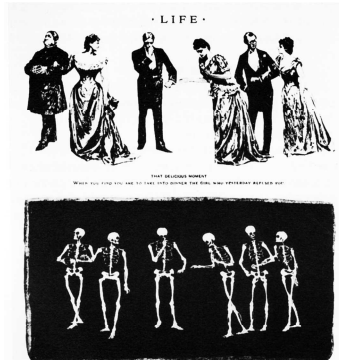


図6. LIFE誌に掲載された
風刺画

大衆のX線の受け取り方は「ベルタ夫人の手」の透過写真にも

っばら好奇の目がむけられ、どこか度が過ぎたブームの流れを作っていた。レントゲンが、「死の光線」という情緒的反応を否定するためにもっともわかりやすい科学的証明として発表した妻の「手のX線写真」は今や世間から好奇のまなざしで受けとめられ、体を透視できることの道徳的問題にまでヒートアップしている。パリでは、X線によって体が透けて見えるので女性が一時外を歩かなくなったり（図6）、アメリカではX線を通さないというふれこみの下着まで売りにだされている。

レントゲンはこうした予想外の大衆の反応で妻を傷つける結果をまねいたのではないかと、心配したことだろう。大衆はX線を「死の光線」として受け止めることからその対岸にある娯楽や「エンターテインメントとしてのX線」へとジャンプしていたのである。



図7.1896年2月27日
LIFE誌に掲載された漫画

X線ブームは心血を注いだ彼の科学的営為の過程が無視され、科学的実証手段としてのX線写真が玩具のようにもて遊ばれ、レントゲンの自尊心が傷つけられていることを強調している。ただそれはX線を「死や恐怖」のイメージから切り離すレントゲンの徹底した情報戦略によって一掃され、大衆がX線に対して無防備となった結果でもあった。

丁度この頃、ヘルツによって発明された電信システムが実用化されたばかりで、この新システムにのって一瞬で世界中を駆け巡った初めてのニュースが「X線の発見」であったこともあり、その反響は凄まじいものになった。X線発表直後のレントゲンは多忙を極め、賞賛や嫉妬や神を恐れぬ行為という非難の手紙を読み、次々に舞い込む講演依頼を断り、訳が分からない人の訪問客の対応をし、論文「第1報」でやり残したX線の研究に取りかかる時間もまっ

たくひねりだせずにはいた。X線の発表後の4週間、レントゲンはなんの実験もできずに、怒濤のようにやってきた喧噪にとりまぎれ、当惑した日々を送っている。

「第1章 X線の発見」終わり